

ジョン・キーツにおける理想の詩的世界  
—過去の詩人たちからの受容と変容—

(要 旨)

広島大学大学院文学研究科  
博士課程後期 人文学専攻  
学生番号：D094847  
氏 名：児玉 富美恵

本論文はロマン派詩人であるジョン・キーツ (John Keats, 1795-1821) と過去の詩人たちとの影響関係を分析することによって、キーツの精神的形成過程とキーツの求めた理想の詩的世界を考察するものである。高等教育を受けていないキーツにとって、過去の詩人たちは詩作活動における師であったと言える。本論では、主にエドモンド・スペンサー (Edmund Spenser, 1552?-1599)、ウィリアム・シェイクスピア (William Shakespeare, 1564-1616)、ジョン・ミルトン (John Milton, 1608-1674)、トマス・チャタトン (Thomas Chatterton, 1752-1770) を取り上げ、キーツ自身と彼の作品との関わりを分析していく。特に、1819年9月21日の書簡でミルトン批判をしたあとの時期に注目する。この時期はあまり重視されず、論じられることも少ない。したがって、キーツの最後の時期における詩的世界がどのようなものであったか、十分に解明されているとは言えない。

第一章の「キーツの「詩人」への目覚め」では、最初に当時の社会情勢を概観する。キーツの生きた時代はフランス革命 (1789-1799)、ナポレオン戦争 (1796-1815) に代表されるように、激動の時代であった。キーツを支えた先輩、友人たちの中にも当時の社会情勢に敏感であった者もあり、キーツも人間形成、詩人形成の過程で何がしかの影響を受けた可能性は大きい。

次にキーツの生まれ育った環境に注目する。1815年、キーツは詩人として生きていく決心をするが、ここに至るまでの過程を彼の先輩、友人との関係を中心に検証する。キーツが「詩人」を意識し始めた頃の関心の対象はスペンサーである。「スペンサーに倣いて」(‘Imitation of Spenser’, 1814) などスペンサーに関連する作品を分析し、この時期におけるキーツの詩作態度を探求する。また戦争や宗教、植民地政策によって、自国意識が芽生え、イギリス国民に「英国らしさ」(Englishness) の概念が生まれた時期でもある。その概念がキーツの作品ではどのように表現されているかを分析し、今後の詩人形成に「英国らしさ」が大きく関わっていることを考察する。

第二章の「キーツとシェイクスピア」では、キーツが書簡や作品の中でシェイクスピアについてどのように語っているか、彼のシェイクスピアへの思いを分析する。二つのソネット「海に寄せて」(‘On the Sea’, 1817)、「『リア王』を再読して」(‘On Sitting Down to Read *King Lear* Once Again’, 1818) において『リ

ア王』 (*King Lear*, 1604-1605) との影響関係を、物語詩『エンディミオン』 (*Endymion*, 1817) において『あらし』 (*The Tempest*, 1611?)、『夏の夜の夢』 (*A Midsummer Night's Dream*, 1594-1596) との関係を中心に分析し、詩作上シェイクスピアがキーツに与えた要素を考察する。

キーツがこの偉大な詩人に深く共鳴していく契機は批評家・随筆家であるウィリアム・ハズリット (William Hazlitt, 1778-1830) によるところが大きい。1817年 12月 27日頃の弟ジョージとトムに宛てた書簡で示された「消極的受容力」 ('Negative Capability') の思想もハズリットのシェイクスピア論に負うところがある。シェイクスピアに関して、キーツがハズリットから学んだことを「消極的受容力」の思想の観点からも考察する。

第三章の「キーツとミルトン—キーツの「驚異の年」を巡って・第一部一」では、キーツの「驚異の年」と言われる 1818年 9月から 1819年 9月までの作品に着目する。まずオード「ミルトンの髪の毛を見て」 ('Lines on Seeing a Lock of Milton's Hair', 1818) や書簡からキーツのミルトンに対する敬愛の思いを探る。

キーツは 1818年秋から『ハイピリアン』 (*Hyperion*) に取り掛かるが、1819年 4月に中断する。同年 7月、『ハイピリアン』の改作『ハイピリアンの没落』 (*The Fall of Hyperion*) を創作し始めるが 9月 21日に創作を断念する。この時期はキーツのミルトンへの思いが冷める時期である。二つの『ハイピリアン』における文体の変化、書簡に示されたキーツのミルトンへの言及の変化を分析する。物語詩『レイミア』 (*Lamia*, 1819) は『ハイピリアンの没落』とほぼ同時期の作品であり、ミルトン色の濃い作品である。1818年秋から 1819年秋にかけて書かれたこれら三作品に焦点をあて、キーツがミルトンから離れた理由はミルトンの文体のほか、ミルトンの思想性、ブルームの言う「影響の不安」もあるのではないかという点に留意し、キーツの心の変化を探求する。この期間の中頃の 5月は有名なオード群が書かれた時期でもある。評価の高い作品が生み出されていく過程にキーツの内面におけるミルトンへの変化も多いに作用していると考えられる。ミルトンからの決別は詩人としての転換点と位置付けることが可能であると論じる。

第四章の「キーツとチャタトン—キーツの「驚異の年」を巡って・第二部一」では、「驚異の年」におけるミルトンからチャタトンへの移行期に注目する。まず

ソネット「おお、チャタトンよ！あなたの運命はなんと哀れむべきことか！」（‘Oh Chatterton! how very sad thy fate’, 1815）、書簡体詩「ジョージ・フェルトン・マシューへ」（‘To George Felton Mathew’, 1815）、『エンディミオン』の献辞などからキーツのチャタトンへの思いを確認する。1819年9月21日の友人ジョン・ハミルトン・レノルズ（John Hamilton Reynolds, 1794-1852）への書簡で、キーツはチャタトンを「イギリスの言語において最も純粋な作家」（‘the purest writer in the English Language’）と絶賛したあと厳しいミルトン批判を展開し、『ハイピリアン』の断念を明言する。この突然のようにも思えるミルトンからチャタトンへの関心の推移を分析する。キーツの時代に芽生えた〈英国らしさ〉の概念が、この時期のキーツにも作用しているかどうかも含めて検証する。

先の書簡と同時期に書かれた「秋に寄せて」（‘To Autumn’, 1819）はミルトンからチャタトンへの関心の移行を如実に示している作品である。チャタトンの悲劇『武人イーラ』（*Aella*, 1768）における「第三の吟遊詩人」（‘Thyrde Mynstrelle’）が語る詩と「秋に寄せて」を比較検討する。また『聖アグネス祭の前夜』（*The Eve of St. Agnes*, 1819）、『聖マルコ祭の前夜』（*The Eve of St. Mark*, 1819）もチャタトンの影響を受けている。これらは『ハイピリアン』創作中の1819年1月から2月にかけて書かれていることに着目し、キーツの内面で秘かにミルトンからチャタトンへの移行が起こりつつあったことを検証する。

キーツにとってチャタトンの存在は保守的、伝統的文学界に挑戦する手段である純粋なく母国語〉での創作を教えてくれた師とも言える存在であったこと、また「消極的受容力」の概念とチャタトンの創作との関連性も合わせて論証する。

第五章の「キーツの理想の詩人への挑戦—‘gradus ad Parnassum altissimum’を求めて—」では、キーツの関心がミルトンからチャタトンに移ったあと、つまりキーツの創作活動における最後の時期の作品、史劇『スティーヴン王』（*King Stephen*, 1819）と風刺詩『鈴つき帽子』（*The Cap and Bells*, 1819）に注目する。これらの二作品を執筆している頃の1819年11月17日に書かれたロンドンの出版業者ジョン・テイラー（John Taylor 1781-1864）への書簡において、「最も高いパルナッソス山への階梯」（‘gradus ad Parnassum altissimum’）を求めるといふキーツの決意とともに、詩作に対する最終的な方向性が提示されている。し

たがって、『スティーヴン王』と『鈴つき帽子』において、集大成としての要素が発見される可能性も考えられる。また『鈴つき帽子』とキーツの生涯最後の作品「将来、多くの知識を蓄えた賢人が」(‘In after time a sage of mickle lore’, 1820)は、スペンサーが『妖精の女王』(*The Faerie Queene*, 1590-1596)で用いたスペンサー連で書かれている。キーツにとってスペンサーへの回帰は、彼の詩的人生において何を意味しているのかという観点で、スペンサーの果たしている役割も考察する。

第一章のスペンサーから第四章のチャタトンに至るまで、各章で検証してきた過去の詩人たちとの関わりは、キーツの詩作活動において、「消極的受容力」の思想を表現するために最も適したスタイルを模索する過程でもあった。「秋に寄せて」については第四章において、チャタトンとの観点で考察をするが、第五章では、社会的、政治的な観点で再解釈する。それと同時に、これまであまり顧みられてこなかった 1819 年 9 月以降の最後のステージに注目することによって、キーツが過去の詩人たちからの受容と変容を経て、「消極的受容力」の思想を表現するために求め続けた理想の詩的世界を論じる。そして、最終的にキーツが目指していた詩人像は如何なるものであるのかを結論付ける。